

津久井湖城山公園ガイドブック

自然のモザイク ざくざく案内

城山の四季といきものたち



津久井湖城山公園ガイドブック

自然のモザイク
ざくざく案内



頒布価格 500円 (消費税込)
(公財) 神奈川県公園協会

■津久井湖城山公園オススメ ウォーキングコース

県立津久井湖城山公園は、現在では標高375mの城山を中心としたみどり豊かな公園ですが、その名前が物語るように、戦国時代には山城がありました。そんな歴史と自然にあふれる公園を歩いてみませんか。

①根小屋地区～山頂部コース

出発は城山の麓、根小屋地区を散策。遊具と芝生の広がる四季の広場は子供たちの人気スポット。〈こいじ〉からはうっそうとした山の中へ。今から約100年前に建てられた築井城趾碑が迎えてくれます。これよりいよいよまきみち（女坂）へ。このコースでは公園の東西南北の斜面を歩けるので山の木々の移り変わりが楽しめます。山頂部尾根へ到着し飯縄神社と大杉へ。帰りはくるま坂（男坂）を降りてきます。所要時間：約2時間

②花の苑地～山頂部コース

出発の花の苑地は春先のサクラが圧巻。桜の小道全体をピンク色に包み見事です。その小道を抜けるといよいよ荒川登山道へ。歴史ある江川ヒノキの林が迎えてくれます。ヒノキ林を過ぎ、くさり場を抜けると宝ヶ池へ。その先の鷹射場は関東平野が望めるビュースポット。運が良ければスカイツリーが見えるかもしれません。飯縄神社を抜



築井城趾碑／かつて、この地に山城が築かれていたことを静かに伝えています。



江川ヒノキ林／江戸末期に伊豆国韮山の代官江川太郎左衛門の命により植林されました。（神奈川美林50選・相模原市登録天然記念物）



鷹射場／天気よく、空気が澄んだ日には、首都圏やスカイツリーが望めます。

けて山頂部に着けば江戸時代の石碑「築井古城記碑」が迎えてくれます。まきみち（女坂）を下って、途中小網登山道から小網へ抜ければ花の苑地へと戻ってきます。所要時間：約2時間半

- ①根小屋地区～山頂部コース（所要時間：約2時間）
 パークセンター⇒四季の広場⇒〈こいじ〉⇒築井城趾碑⇒南側中腹分岐（No.7）⇒まきみち（女坂）⇒山頂部尾根分岐（No.17）⇒飯縄神社⇒大杉⇒くるま坂（男坂）⇒南側中腹分岐（No.7）⇒城坂⇒御屋敷広場⇒城坂橋⇒パークセンター
- ②花の苑地～山頂部コース（所要時間：約2時間半）
 花の苑地⇒桜の小道⇒北側麓分岐（No.2）⇒荒川登山道⇒宝ヶ池⇒鷹射場⇒大杉⇒飯縄神社⇒太鼓曲輪⇒本城曲輪⇒山頂部尾根分岐（No.17）⇒まきみち（女坂）⇒小網分岐（No.18）⇒小網登山道⇒桜の小道⇒花の苑地





山頂から三増峠・金原方面を望む

自然のモザイク ざくざく案内 もくじ

第1章 はじめに

城山の歴史	04
城山の森	06
コラム「見える？見えない？」	
城山山頂からの富士山	08

第2章 城山の四季物語

城山の四季、移り変わり	10
1. 春の城山	
・春に見られるなかまたち	12
・はかなくも美しく咲く早春花	14
・虫たちが集う「花のレストラン」	15
・デジカメで自然観察	16
・城山の鳥暦（とりごよみ）	17
・バードウォッチング（春夏編）	18
2. 夏の城山	
・夏に見られるなかまたち	20
・シダの魅力	22
・神出鬼没の腐生植物	24
・夏鳥のパラダイス	25
・虫たちが集う「樹液酒場」	26
・雑木林の女王オオムラサキ	28

3. 秋の城山

・秋に見られるなかまたち	30
・森の大きな住人たち	32
・森の小さな住人たち	33
・バードウォッチング〈秋冬編〉	35
コラム「城山名木物語」	36

4. 冬の城山

・冬に見られるなかまたち	38
・鳥とムササビの住宅地図	40
・公園のムササビ物語	41
コラム「ハンデを負ったムササビたち」	45
・雑木林と暮らし	46

第3章 公園の自然を守るために

・「利用」と「保全」	48
・「在来種」と「移入種（外来種）」	49
・資料「自然環境調査報告書」より	50
・パークセンターとイベント	52
・津久井湖城山公園を 歩くみなさまへ	54
図鑑さくいん	55
交通のご案内	56
あとがき	57

第1章 はじめに

津久井湖城山公園の森が
今のようになるまでの話

城山の歴史

よみがえった森

●津久井城の時代

～城山はハゲ山だった！～

春や秋に木々が美しく色づく城山は、かつては津久井城という山城でした。

山城では、敵を早く発見するための眺望の確保が重要であるうえに、建築や土木用に大量の木材を使用していました。そのため、水の手（水源）の周囲を除いて、ほとんど樹木はなく丸裸だったというのが定説となっています。

丸裸だったのは津久井城だけではありません。相模川流域は木材の供給地として古くから注目され、街の発展に伴い木材需要が増えたため、当時の技術で伐り出せるものは全て伐採され、奥山を除いた山々は、ほぼハゲ山であったようです。



新編相模国風土記稿より三増峠の図（図の名称：新編三増合戦古戦場図）

●おはやし御林

～森林をよみがえらせた江戸幕府～

城山に森林をよみがえらせたのは江戸幕府による森林保護政策です。

城山の南方に、後北条氏との戦いで武田氏が勝利したとされる三増峠があります（三増合戦／1569年）。1590年にこの戦場を視察した徳川家康は、「林にしておけば武田勢にやすやすと陣を張られることもなかったはずだ。すぐに木を植えよ」と植林を命じたそうです。

その後1661年、幕府は林産資源の保護・育成のため、今の林野庁にあたる「山奉行」、「御林奉行」などの森林官吏を置き、「御林[※]」を設けました。

戦場となった三増峠（志田山）や津

久井城（城山）など、津久井の多くの山々も御林となりました。

この御林が、明治時代以降に「官林・御料林」、「国有林」となり、津久井湖城山公園の中腹以上に残る現在の森林へと続いています。

※御林（おはやし・おへーし）
下草から枯れ枝まで採集を禁じた幕府直轄林

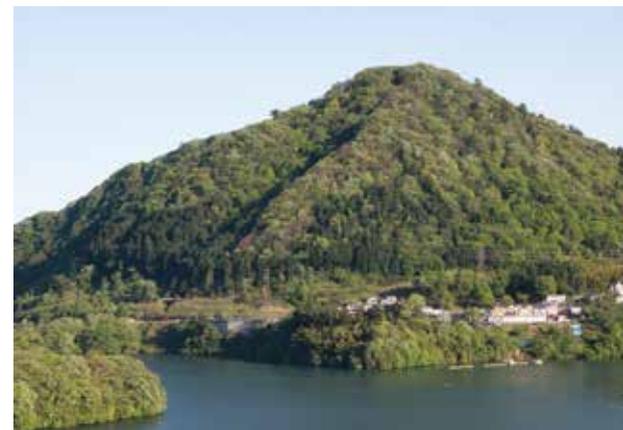
●「江川ヒノキ」林

津久井湖城山公園の北斜面にあるヒノキ林は1848年2月に、代官の江川太郎左衛門英龍（担庵）の指導により当時の太井村農民が植林したもので「江川ヒノキ」と呼ばれています。

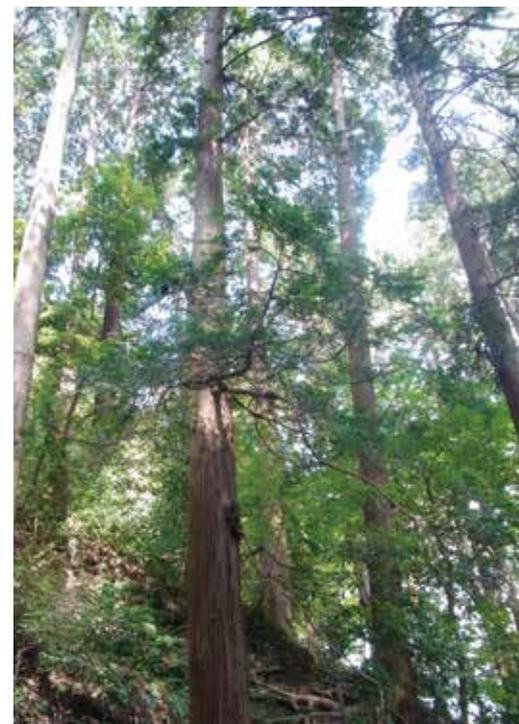
ヒノキが植林されるようになったのは江戸時代の後半からです。それまでの御林は建築用材としてのマツや薪炭としての需要が高い雑木類を主体に構成されていたと思われる。

このヒノキ林は、神奈川の美林50選に選ばれるなど、津久井湖側から見るとその樹容がひととき目立ちます。

また、御林を守り伝えた歴史的な自然景観であり、津久井地域の豊かな山林資源を現代に伝えるものとして、平成27年4月1日に相模原市の登録天然記念物となりました。



津久井湖から見た江川ヒノキ林



園路から見た江川ヒノキ林

城山の森

●津久井湖城山公園の植生

みどり豊かな日本の国土では、森を伐ってもすぐに草が生えてきます。

2、3年もすれば、生い茂った草藪からは木々が頭をもたげ、人が手を加えなくても森にかわっていきます。森は水をたたえ、動物の餌と住処を与えて豊かな自然をはぐくみます。

しかし、よく見ると、地域によって生えている木の種類は違って、森の形も違ってきます。

森の形とそこに生える樹木の種類が決まるには、いくつかの要素があります。樹木の生育に大きく影響するのは水分と気温ですが、日本は降水量が多く、そこに生えてくる樹種に大きな影響を与えるのは気温です。

温帯域にある日本列島では、関東より西の太平洋側は常緑広葉樹の森が覆っています。しかし、東北地方など北の方では落葉広葉樹が生えています。ちょうどこの辺りは暖温帯と冷温帯の境にあたります。平坦地では常緑のカシ類が生えていますが、山間部に入り標高が高くなると落葉の木が目立ってきます。標高の高いところは気温が下がるため丹沢でも800m付近からブナの林が広がっています。

城山ぐらいの低山では、暖かい所には常緑樹が、涼しいところには落葉樹



コナラ (落葉)



アラカシ (常緑)



ミズキ (落葉)



モミ (常緑)



スギ林

が生えています。おそらく、人の手が入る以前の城山は南面は常緑樹、北面は落葉樹で覆われていたと思われます。

城山の稜線部にはモミの木がみられます。モミは暖温帯林と冷温帯林の境付近に生育する樹種です。

●パッチワークのような森

津久井湖城山公園は、山城であった時代には樹木が伐採されていましたが、現在では豊かな木々に覆われています。

自然に木が生えてきた場所。人が木を植えた場所。それに、人の手が加わった場所や放置されていた場所などで、

異なった樹木が見られます。

城山の森を遠くから見ると緑の濃さや枝の盛り上がりパッチ状の変化が見られます。また森に入ってみても、木漏れ日による明るさや、低い樹木が造る藪の違いがあるのが分かります。



春の城山

見える？ 見えない？ 城山山頂からの富士山

山頂からの展望を求めて、快晴の冬の早朝、パークセンターから息をきらして登ること30分。頂上についた妻と私は、北から時計回りに景色を指差しながら眺めました。今日は視界も良く、日光男体山も見えています。あれが西武ドーム、筑波山……、三頭山、高尾山、八王子城跡。素晴らしい景色ですが、何か一つ足りません。「あれ？ 富士山が見えないね。」

実は、城山山頂からは富士山は見えないのです。1.地図と定規を使った計算式、2.最新の山岳景観ソフト、どちらの方法で調べても、理論的な答えは「わずかな標高差で見えない」と出ます。

では、いったい何が邪魔をしているのでしょうか。地図で調べてみると、犯人は黍殻山と焼山間の「北丹沢の稜線」のようです。筆者は理論値を「実写検証」してみることにしました。



JR横浜線付近からの城山と富士山。
このあたりから富士山が見える。

地図上で富士山と城山を直線で結び、さらに富士山と反対側の東北東に線を伸ばします。「犯人」が「北丹沢の稜線」ならば、1.の計算式を使うと、相模原市緑区相原あたりから、城山と北丹沢の稜線の後ろ側に富士山が見えはじめ、さらに離れた町田市小山ヶ丘付近では、富士山の姿が、さらにはっきり見えてくるはずです。



城山北方約1.8km飯縄権現（緑区中沢）からの富士山。このうち頂上部にかかった笠雲部分だけが、城山山頂から見えることがある。

「実写検証」してみると、やはり富士山の展望を遮っていた「犯人」は北丹沢の稜線で、確かに城山山頂からは富士山は見えません。しかし、富士山頂に笠雲がかかった時、その雲が城山山頂から見えることがあります。それゆえ、「わずかな標高差で見えない」という理論的な答えが正しいことが、実際の眺望から証明されていると言えます。

第2章

城山の四季物語

津久井湖城山公園の一年間の
自然を紹介する話

城山の四季、移り変わり



根小屋駐車場から四季の城山を望む

1. 春の城山

山の木々が芽吹き、
サクラが咲き始める3月末頃から
城山の春は始まります。



春に見られるなかまたち

●芽吹き季節

津久井湖城山公園の春は、山の木々が芽吹く3月末頃から始まります。冬の間、茶色に被われていた山肌が黄緑色に染まり、白から淡紅色のヤマザクラの花が散りばめられ、淡い黄色のキブシの花が開くと、山全体が優しく生き活きた感じになります。



四季の広場

●散策路を歩くと

足元を見ると、カントウタンポポや十数種類に上るスミレ類やニンソウなどの春の山野草に出会うことができます。足元からも春がやってきます。



オオイヌノフグリ

●春の新葉

芽吹き季節、冬の寒さを耐えた植物たちが一気に葉を開きます。新葉の色や形、大きさなどは木によって十人十色。毛の有無や葉の付き方などにも注目してみてください。新葉は強い光に弱いので最初の葉は赤く色づいている場合もあります。春は植物の色々な表情に出会えます。



タチツボスミレ

●虫たちの活動開始

冬を耐えて待ちに待った花の季節です。開花を待っていた虫たちも活動を始めます。足もとに咲くスミレやタンポポなどの花々にはミヤマセセリやピロードツリアブなどが、樹木の花にはコツバメやトラフシジミなどの昆虫たちがやってきて賑わいます。植物はそうした虫たちに花粉を運んでもらい受粉します。お互い持ちつ持たれつ関係です。



ミヤマセセリ



ウグイス

●足もとをガサゴソ…トカゲとカナヘビ

春先に園路を歩くとそこかしこでガサゴソ音がします。長い冬を冬眠で耐えたトカゲやカナヘビが日光で体を温め、餌を探しに園路際までやって来ています。春が



ニホントカゲ



メジロ

進めば繁殖シーズン。今度は園路脇で小さな闘争を繰り広げています。

●野鳥のさえずり

春になって鳥たちのさえずりが始まると一層賑やかになります。一番有名なのは“ホー、ホケキョッ”となくウグイスでしょうか。メジロやシジュウカラなど身近な鳥たちも枝先など目立つ所に止まってさえずります。では、なぜさえずるのでしょうか。春は繁殖の季節です。自分の縄張りを守るため周りのライバルに対して大きな声で主張します。そしてもちろん、恋の相手を見つけるためにキレイな声で惹きつけます。

●その他に見られる花木



ヤマツツジ



ウグイスカグラ



キブシ



コブシ



アセビ

●その他に見られるいきもの



キチョウ



ベニシジミ



アカボシゴマダラ



シジュウカラ



ヤマガラ

はかなくも美しく咲く早春花

●はかなくも美しく咲く早春花 スプリング・エフェメラル

エフェメラルとは、「はかない命」という意味です。スプリング・エフェメラルと呼ばれる早春花は、落葉樹林の林床で、春の足音がきこえるかどうかのうちに芽を出します。木々の葉が展開して日光が遮られる前には開花して、新緑に覆われる頃には、地上の葉や茎は消えて無くなってしまいます。



ニリンソウ

津久井湖城山公園では、ニリンソウがその代表と言えます。4月中旬、沢沿いにいつのまにかこんもりとした群落が現れて、白く可憐な花をたくさんつけます。その後結実して、他の植物と置き換わるように地上部が静かに消えていきます。

公園ではほかに、ムラサキケマンも同じようなタイミングで開花、結実します。

しかし、公園は雑木林として林内を明るく整備している場所が少ないため、そのほかのスプリング・エフェメラルは現在は見られません。樹林の手入れの仕方によっては、古い文献に生育の記録が残るアズマイチゲ、フクジュソウ、カタクリといったスプリング・エフェメラルを代表する植物が再び見られるようになるかもしれません。



ムラサキケマン



カタクリ



フクジュソウ

虫たちが集う「花のレストラン」

春の津久井湖城山公園にはたくさん花々が咲きます。無事に冬越しした虫たちは、花の蜜や花粉を求めて花に集まってきます。そこが虫たちの「花のレストラン」です。

よく観察すると、チョウのなかまのように蜜を吸うものや、コアオハナムグリのように花粉を食べたり、蜜をな

めたりするものがあります。また、ハナアブのなかまは、なめるようにして花粉や蜜を食べます。ミツバチのように花粉団子をつくり、巣に持ち帰るものもいます。

こんなふうには花のレストランで食事をした虫たちのお礼は、花粉を運んで、種子づくりのお手伝いをすることです。



タンポポレストランのセイヨウミツバチ



蜜を吸うウスバアゲハ



花粉を食べるハナアブ



花粉を食べるコアオハナムグリ

デジカメで自然観察

●プロが教える！ 撮影のヒント

津久井湖城山公園は四季を通して散策を楽しめる場所です。その記録を残しておく、さらに楽しくなります。

写す面白さ、後になって写真を見る楽しさも増えるので、デジカメで公園の自然をぜひ写してみてください。

◆虫眼鏡を使って写そう

花や虫たちを写す場合は、被写体が小さいので接写（マクロ）撮影します。さらに大きく写したい場合は、虫メガネをレンズに付けて写してみましょう。



◆花を写してみよう

公園には、季節ごとにきれいな花がたくさん咲きます。自分が見ている角度で写すだけでなく、いろいろな角度から写してみてください。



例えば、地面から見上げる

ように写すと新しい発見があります。また、離れた所から撮ったり、接近して花を大きく写したりしてみましょう。

◆虫を写そう

動き回る虫たちの撮影は難しいので、望遠レンズを使ってみましょう。ズームレンズの場合は望遠側で写すとよいでしょう。また、広角レンズで大接近して周りの環境と共に写すのも楽しいものです。

◆携帯電話で写してみよう

花や虫たちを携帯電話でも撮影できます。接写撮影できる機種もありますし、虫めがねを利用するのもよいでしょう。携帯電話の場合、縦位置で写すことが多くなりますが、横位置で写すと広がりのある写真が撮れます。

◆写真はプリントして名前を調べよう

ネットや図鑑で名前を調べると知識が広がり、自分の図鑑を作ることができます。名前が分からないときは、津久井湖城山公園パークセンターや相模原市立博物館で教えてもらえます。

※写真撮影にあたっての注意
 ・ほかの来園者の迷惑にならないように撮影しましょう。
 ・撮影のために、貴重なほかの植物などを踏みつけたりしないよう注意しましょう。

城山の鳥暦（とりごよみ）

城山は標高は高くないものの、低山に来る野鳥と高山に来る野鳥が集まる特徴をもつ単独の山です。

比較的標高の低い根小屋地区（一周約2km）は、里山によく見られる野鳥が集まりやすく、観察しやすい場所

です。一方、山頂へ至る登山道では林内にすむ野鳥に出会えるなど、それぞれの楽しみがあります。

耳を澄まして静かに歩き、木々や草むらが動く音の方向を観察してみましょう。

◆鳥暦（一年間のデータ）

和名		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
冬鳥	マヒワ												
	ウソ												
	ルリビタキ、ジョウビタキ												
	クロジ												
	アオジ												
	ツグミ、トラツグミ												
	アカハラ、シロハラ												
	シメ												
	ノスリ												
	カワラヒワ												
夏鳥	イカル												
	ホトトギス												
	ヤブサメ												
	キビタキ												
	オオルリ												
留鳥	ツバメ												
	イワツバメ												
	スズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、ヤマガラ、エナガ、シジュウカラ、メジロ、コゲラ、アオゲラ、ドバト、キジバト、ウグイス、ハシボソガラス												

◆通年見られる鳥



メジロ
 名前のとおり、目の周りが白い。ウグイスとよく間違えられる。



シジュウカラ
 お腹にネクタイのような黒い線がある。太いのがオス、細いのがメスと区別できる。



コゲラ
 世界最小のキツツキ。冬にギューという、特徴的な声で鳴く。



ヤマガラ
 お腹は赤茶色、オスとメスの区別が付きにくい。賢く、人なつこい。



エナガ
 体のわりに尾が長く、薄いピンクのボディが特徴。

バードウォッチング〈春夏編〉



ツバメ



イワツバメ 巣作り



ヤブサメ

木々が開けた場所では、ツバメ、イワツバメなどツバメのなかまがよく見られます。また、キビタキなどヒタキ類やクロツグミなども見ることができます。林内では、ヤブサメやセンダイムシクイ、オオルリなどの声や姿が観察できるかも？

巣箱を チェック!



～春は子育ての季節～

津久井湖城山公園内の巣箱を静かに観察してみてください。シジュウカラやヤマガラなどの子育ての様子を見ることができます。

■お母さんが巣作りをして 卵を温めます

シジュウカラのメスは、コケや動物の毛、羽毛などを運び込んで巣作りをします。

毎日1個ずつ卵を産み、全部生み終えてから温めはじめるので、ヒナたちは同時に卵からかえります（シジュウカラは8～13個、ヤマガラは6個程度）。親が真ん中に座って温められるよう、卵はきれいに丸く並べられています。この間、オスは巣箱の周りでさえずり、メスにエサをプレゼントする姿が見られます。

■子育ては両親一緒に、毎日大忙し!

ヒナがかえると、オス、メスとも約5分おきにエサを与えながら、子供たちのフンを巣箱の外に運び出します。

食欲旺盛な子供たちのため、お父さんもお母さんも大忙しです。

■巣立ち

そんな期間を1か月ほど経て、子供たちはようやく巣の外に出てきますが、しばらくは親と一緒に過ごし、エサをもらいます。自立をうながす時期になると、親はエサを見せびらかすだけで、子供には与えません。

※子育て中の鳥たちは、とても神経質。静かに見守ってあげてください。

子育て中の
シジュウカラ



巣箱の中

2. 夏の城山

太陽の光を浴びようと、城山の木々は葉をめいっぱい広げています。そのため、城山は黄緑や深緑などの様々な緑色に覆われた山になります。



夏に見られるなかまたち

●夏の城山は生きる力がいっぱい!

津久井湖城山公園の初夏は見どころいっぱいです。ヤマユリやオカトラノオといった花々にはクロアゲハやキアゲハなどの蝶が訪れ、ヤマボウシやウツギの白い花が山を彩ります。テイカカズラやスイカズラなど蔓性の植物たちはつるを伸ばして木々に絡み、良い香りの花を一面に付け咲き競います。



ミズキ

そんな木々の上でホトトギスやキビタキがさえずります。梅雨が明け本格的な夏の訪れを迎えると、鳥たち

の繁殖期も終わり、花も少なくなって、夏の公園には落ち着いた時間が流れていきます。



ゴマダラカミキリ



クロアゲハ

●その他に見られる花木



ヤマアジサイ



ヤブデマリ



ウツギ



ヤマユリ



オカトラノオ

●虫も鳥も大賑わい

津久井湖城山公園の夏は、里山の夏です。里山の森の中にはクヌギやコナラといった樹液の出る木々が多く、カブトムシやカナブン、オオムラサキ、サトキマダラヒカゲ、オオスズメバチなどの虫たちが樹液を求めて集まり賑わいます。また、タマムシが木々の上をキラキラと飛んでいる姿も見られます。



ヤマトタマムシ

夏が深まるとセミたちの天下です。アブラゼミはもちろんツクツクボウシやミンミンゼミが鳴き、夕方になるとヒグラシが夏の日暮れを告げてくれます。

●ゼフィルス

(樹上性シジミチョウの話)

ゼフィルスとは6月中旬～7月初旬の1か月間だけ出会うことのできる樹上性シジミチョウの総称です。ギリシャ神話の西風の精『ゼフィロス』が語源で、『そよ風の精』の意味があるそうです。夕方樹上を活発に飛び回り、雄は縄張りを持っていて、枝先などに止まり同種の蝶が縄張りに入ってくると追い払ったりもします。幼虫の多くはブナ科の樹木の葉を食べ、森林性が強いので、城山の自然の豊かさの象徴でもあります。公園ではアカシジミやウラナミアカシジミなどに会うことができます。



ミンミンゼミ



オオムラサキ

●その他に見られるいきもの



カブトムシ



ノコギリクワガタ



キビタキ



アカシジミ



ウラナミアカシジミ

シダの魅力

●城山の森の名脇役

シダは、花の咲かない植物の中で、最も「葉」ぶりがよく「栄えているグループです。シダには茎がありますが、あまり目立ちません。私たちが見るのは「葉」です。

津久井湖城山公園では、およそ100種類ものシダが確認されています。



ベニシダ

◆公園でよく見られるシダ



ベニシダ
林の中に普通にある



コウヤワラビ
少し湿った林の中に多い



ヤマイタチシダ
乾いた崖のような所に多い



オオバノイノモトソウ
少し乾いた傾斜地に見られる



イヌワラビ
土手のような場所に普通にある



ゼンマイ
山道の脇に多く、食べられる

葉には、大きなものから小さなものまで、薄いものから厚いものまで、ごく簡単な形のものから非常に複雑に切れ込んでいるものまで、いろいろなものがあります。



イヌガンソク

◆これもシダ?! ~シダらしくないシダ~



マメツタ
服のボタンのようなシダ



ウチワゴケ
極薄でコケのようなシダ



トウゲシバ
針葉樹の枝葉のようなシダ

◆ワラビの展開

伸びゆくシダの姿には、太古から絶えることのない命の息吹がみなぎっています。



ワラビ



イヌワラビ群落

◆胞子のつき方いろいろ

シダは、花が咲かないので胞子で殖えます。その胞子のつき方はいろいろあって、それがシダの大きな特徴になっています。



スギナ (ツクシ)



イヌガンソク



ベニシダ



オオバノイノモトソウ

神出鬼没の腐生植物

春から初夏にかけて、林内に目を凝らしていると、白く怪しげに立ち上がる植物を見ることがあります。いや、知らなければ植物とも見えないかもしれません。印象はむしろキノコに近いもの、それがギンリョウソウです。

ギンリョウソウは、自ら光合成を行うことができません。葉緑素が無いので植物体は真っ白。葉も退化して痕跡程度しかありません。花だけが頭でっかちに咲きます。ではどうやって栄養を得ているのでしょうか。

樹木がある種の菌類と共生して形成する外菌根という組織があり、そこで形成された有機物を、菌類に寄生し横取りしているのです。ちょっと複雑な寄生のしかたですね。ただし、こうした生活をしているだけに、なかなか安定した生育地はありません。言わば神出鬼没。ある時ひょっこり出てきては消えていきます。

ほかにも同じ腐生植物のクロヤツシロランや、アジサイのなかまの根に寄生するキヨスミウツボなど、津久井湖城山公園には不思議な生活を送る植物が「突然」出現することがあります。寄生された植物や菌には迷惑な話でしょうが、見つけたときはちょっと嬉しくなります。



ギンリョウソウ



クロヤツシロラン



キヨスミウツボ

夏鳥のパラダイス

初夏、鳥たちのさえずりは、鮮やかな新緑を際立たせる最も優れた演出効果があります。キビタキはその代表的な種ですが、じつはこの鳥、姿も抜群に美しいのです。喉から胸にかけての目の覚めるような黄色を、花のスイセン（Narcissus）になぞらえ、英名を Narcissus Flycatcher と言います。

さて、城山はキビタキをはじめとした夏鳥がとても多い山です。特に北側の樹林内は、最盛期の5月中旬になると、数十メートルおきにキビタキのさえずりが聞かれるほどです。立ち止まってしばらく観察していると、雄同士の小競り合いが見られることも少なくありません。

さらに、沢沿いを中心にオオルリも多く、場所によってはセンダイムシクイやコサメビタキ、サンショウクイの声や姿を観察できます。

なぜ、これほど多くの夏鳥が見られるのでしょうか。それには城山の位置と地形が関係していると推測されます。

城山は、相模川が中流域から渓谷へと変わる境目にこんもりと独立してそびえています。相模川に沿って移動してきた渡り鳥にとって、これ以上の目印はありません。さらに、斜面を被う樹林は樹種が多様で大木も含まれます。南側の地形は複雑で、入り組んだ沢が営業しやすい場所をたくさん提供しています。こうした条件がうまく重なって、夏鳥のパラダイスを形成しているのでしょう。



キビタキ♂



キビタキ♀



コサメビタキ



オオルリ

虫たちが集う「樹液酒場」

夏は虫たちが最も盛んに活動する季節です。

クヌギやコナラなどには、その樹液を求めてカブトムシ、クワガタ類、オオムラサキなどが集まります。

春の花々は「レストラン」、夏の樹液は「酒場」といったところで、虫たちを観察するには最適です。



クヌギの樹液を吸うカブトムシとオオムラサキ

●樹液はなぜ出るの？

樹液は幹の傷ついている部分から出ます。木の皮の下にある、養分を運ぶ組織（維管束）を傷つけると樹液が出るのです。

その傷は、シロスジカミキリなどの産卵のために、また、ボクトウガという「蛾」の幼虫が穴をあけてもぐりこみ、樹液が出るようにするために作られます。このボクトウガの幼虫は樹液を出



シロスジカミキリの産卵

させて、その樹液に集まった虫を食べる習性があります。

●樹液の出る木が少なくなったのは……

昔（昭和30年代以前）は、雑木林に多くの樹液酒場があり、カブトムシ、クワガタ類、カナブン類などの甲虫類や、オオムラサキ、スミナガシ、ゴマダラチョウ、ルリタテハなどの蝶類、さらにはオオスズメバチなどの樹液昆虫がたくさん集まっていました。

ところが近年、虫たちの樹液酒場は少なくなりました。その理由は、私たちの生活と密接に関係しているのです。

昔はクヌギやコナラを約20年おきに切り倒し、その薪や炭を燃料として利用していました。そのため雑木林は常に更新され、虫たちにとって樹皮を傷つけやすい若い木々が多くありました。

近年は化石燃料（石炭、石油）の利用が中心になり、雑木林は手入れをされなくなりました。

そのために木々が大きくなりすぎて、硬くなった樹皮は傷をつけにくくなり、樹液の出る木が少なくなったのです。

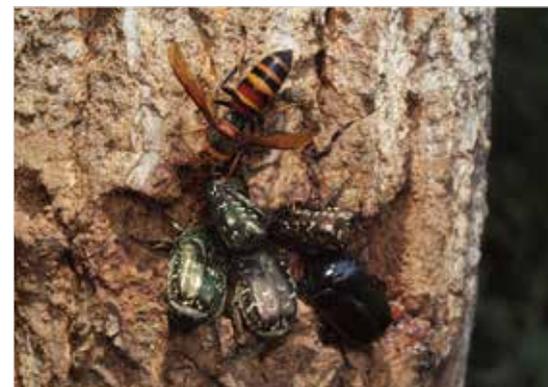
●そして、 津久井湖城山公園では……

木々の高い所に集まる虫たちをデッキ園路から間近に観察できることが、公園の最大の特徴です。

公園では、クヌギやコナラ、ネムノキなどにカブトムシやオオムラサキなど多くの虫が集まります。樹液に集まる虫たちの観察会を毎年行っています。

公園にも、大きくなりすぎて樹液の出なくなった木がたくさんあります。そこで、開園当時からクヌギやコナラの幼木を植栽する一方、古木は計画的に伐採して木々の若返りを図っています。きっと近い将来、この公園でたくさんの樹液昆虫が飛び交うことと思います。

樹液酒場はこれからも皆さんを楽しませてくれることでしょう。しかし、人気のあるカブトムシやクワガタ類、



樹液酒場に集まる虫たち



観察会の様子

オオムラサキが減少しつつあることも事実です。

公園では皆さんが虫たちを採集せず、いつまでも樹液酒場を観察できることを願っています。

雑木林の女王オオムラサキ

雑木林は多様な植物で成り立っています。従って、そこにすむ虫たちの種類も豊富です。その中で一番輝く虫といえば、オオムラサキでしょう。



樹液を吸う成虫♂



終令幼虫



越冬幼虫

●オオムラサキの一年

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
越冬幼虫			幼虫	蛹	成虫	卵	幼虫			越冬	

●津久井湖城山公園のオオムラサキ

このチョウは昔、平地の雑木林などに多く生息していましたが、成虫の餌（樹液など）や幼虫の餌（エノキの葉）の減少から、生息地は次第に里山に限られるようになりました。

幸い、この公園内には生息していて、7月初旬から8月中旬まで成虫が発生し、クヌギやコナラなどで樹液を吸う姿を観察できます。

成虫が産卵した卵はやがて幼虫になりエノキの葉を食べ、11月中旬にエノ

キから降りて幹の近くの落葉の裏で冬を過ごします。春になり4月下旬頃からエノキの幹を上り、新芽を食べながら脱皮を繰り返して成長します。

デッキ園路周辺の樹液の出る木を注意して探すと、成虫を見つけることができます。また、冬場エノキの幹周辺の落葉で過ごす越冬幼虫の姿を観察するのも楽しいものです。

オオムラサキは激減しやすいチョウです。この公園では採集できません。

3. 秋の城山

紅葉が始まると城山は黄色や橙色、赤色に彩られます。カエデ類の紅葉はもちろん、他の木に這い上がるツタウルシも真っ赤に色づき、紅葉を盛り上げます。

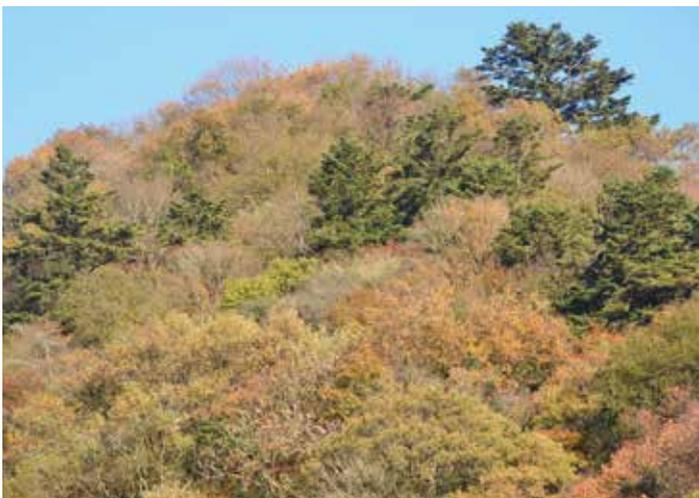


秋に見られるなかまたち

●一年で一番カラフルな美しい季節が訪れます

暑かった夏が終わると秋が山の上から駆け足でやってきます。11月頃には寒さで木々の葉が色づき、錦織の秋となります。

林縁ではタカオヒゴタイやヒヨドリバナ、アズマヤマザミなどが行く秋を惜しむように花開きます。



秋の城山山頂付近

●どんぐりと木の実

津久井湖城山公園も実りの秋です。クヌギやコナラなどのどんぐりをはじめ、オレンジ色に実ったカキノキの実もあれば、初夏に白い花を楽しませてくれたヤマボウシの実も真っ赤に、ムラサキシキブはきれいな紫色に熟します。



ヤマボウシ (実)



ムラサキシキブ (実)

●公園で見られるどんぐり



アラカシ



クヌギ



コナラ



シラカシ



スタジイ

●その他に見られる樹木



アオハダ



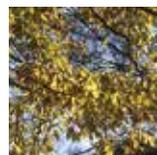
イタヤカエデ



イロハモミジ



ニシキギ



ミズキ

●秋に出会うチョウや鳴く虫、公園はまだまだ賑やかです

暖かな越冬地への渡りの途中のアサギマダラがヒヨドリバナで吸蜜する優雅な姿を見かけます。また、成虫で越冬するウラギンシジミやキタキチョウなどの蝶に出会うこともあります。日が短くなると夕方、コオロギやキリギリスのなかまが草むらや枝先で様々な声で鳴いています。



アサギマダラ



ウラギンシジミ

●城山のカマキリ

秋を代表する虫の一つのカマキリは昆虫界きっての狩人です。前肢が大きな鎌状になっていて、色々な虫を捕まえて食べます。公園では体の大きなオオカマキリ、オオカマキリに似ていて一番普通に見られるチョウセンカマキリ、お腹が幅広く短いハラビロカマキリ、小さくて茶色のココマキリの4種のカマキリに出会うことができます。カマキリ類は秋が深まると泡状の卵鞘(らんしょう)と呼ばれる卵塊を草や枝先、時にはパークセンターの壁にも産みます。春になるとそこからたくさんの仔カマキリが出てきます。



オオカマキリ

●その他に見られるいきもの



チョウセンカマキリ



ココマキリ



ハラビロカマキリ



ウラナシジミ



コオロギ

森の大きな住人たち

●キツネやタヌキ、 イノシシもやってきます

夜になると津久井湖城山公園の森では昼とは違った動物たちが顔を出します。ここではその中でも大きな動物たちを紹介しようと思います。

公園の住人で一番大きな動物はイノシシで、体重は100kgを超えるものもいます。オスは大きな牙が生えています。食べ物、ミミズや昆虫の幼虫、ドングリなどの木の実、植物の根などを食べます。鼻がとても良く匂いに敏感で、実はとても臆病で慎重な性格です。公園では餌を探した掘跡などが見られます。一回り小さい動物としてはタヌキやアナグマ、ハクビシン、アライグマなど中型哺乳類がすんでいます。これらは良く似ていると思われていますが、実はかなり違う動物です。タヌキはイヌ科で家族単位の群れで暮らします。



テン

アナグマはイタチ科で大きな前肢で穴を掘ってすみまします。ハクビシンは東南アジアから人間が持ち込んだジャコウネコ科の動物で、木登りが得意で果実食です。アライグマは北米から人が持ち込んだアライグマ科の動物で、縞模様の尻尾が特徴です。他にも肉食で神奈川では減りつつあるキツネや、山にすみ、木登りの得意なイタチのなかまのテンなども公園にすんでいます。



イノシシ



タヌキ

森の小さな住人たち

津久井湖城山公園には様々な動物たちがすんでいます。その中には、小さな哺乳類のなかまたちもいます。しかし、そんな小さな森の住人を普段ほとんど見かけることはありません。

でも、私たちが気付かないだけで公園の木々やその根元、葉の下、木の穴や岩の割れ目、はたまた枝を積み上げた場所や藪の中、地面の中に穴を掘って暮らすものや、夜になると空を飛ばすやからまで！

運良く出会えたら、そっと見守ってください。

●ネズミのなかま

<森のネズミ>

・アカネズミ

森を代表するネズミ。クリクリの目がとてもかわいい。素早い動きで地面を疾走し、大好物のドングリやクルミを探します。

・ヒメネズミ

木登りが得意な森のネズミ。長い尻尾でバランスを取りながら細い枝先の木の实も食べます。

<草地のネズミ>

・ハツカネズミ

草地や茂みにすむ小さなネズミ。最も身近なネズミのなかまで時には公園の施設内などで発見されることも！



アカネズミ



ヒメネズミ



カヤネズミ

・カヤネズミ

カヤやススキ原にすむとても小さなネズミ。草登りが得意で尻尾に滑り止めまでついています。イネ科などの草に球状の巣を作ります。生息地の減少などで減りつつあるネズミです。(県準絶滅危惧種)

バードウォッチング〈秋冬編〉

●モグラのなかま

・アズマモグラ

公園の登山道などにモコモコと土を盛り上げているモグラです！ 大きな前足がシャベル形をしていて穴掘りが大得意。ミミズが大好き。尾はとても短い。

・ヒミズ

小さなモグラのなかま。積もった枯葉や腐葉土層に穴を掘り昆虫を食べています。ブラシのような尾と長い髭を持っています。



アズマモグラ



ヒミズ



ジネズミ

・ジネズミ

ネズミに似ているけど立派なモグラのなかま。大きな鼻と黒光りした毛並を持っていて、落ち葉の下などを移動しながら昆虫を食べています。

●コウモリのなかま

・アブラコウモリ

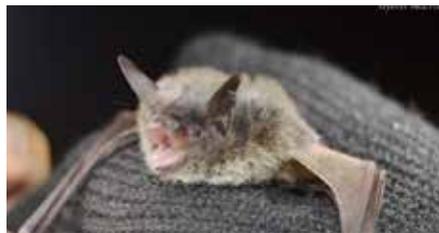
夕暮れ時になると公園の上をひらひらと飛んでいます。丸い耳とつぶらな目が特徴。飛びながらカやガなどの昆虫を食べています。

・モモジロコウモリ

尖った耳と白いお腹の毛が特徴のコウモリ。牢屋の沢で飛んでいるのが確認され、これは津久井でも数少ない記録です。(県準絶滅危惧種)



アブラコウモリ



モモジロコウモリ

秋の津久井湖城山公園には、北方の繁殖地から南方の越冬地へ向かう鳥たちが立ち寄ります。例えば、エゾビタキが渡りの途中に一休みして高い枝に止まり、飛ぶ虫を追いかける様子が見られます。この時期は木の実が多く、鳥たちが餌をついばむ様子も見られるでしょう。



エゾビタキ
胸の縦じま模様が特徴。枝から飛び立ち空中で虫を捕まえるので、ヒタキのなかまはフライキャッチャーと呼ばれています。



オオタカやノスリが、お気に入りの木で休んでいる様子を、パークセンターからも確認することができます。(写真はオオタカ)



デッキ園路は、野鳥を身近に見られる観察スポットです。

●冬は葉が落ちて

野鳥の観察がしやすい時期

普段、川原や谷戸にいるモズやカワラヒワ、ホオジロ、アオジなど、また山間部にいるイカルやシメ、ルリビタキ、ジョウビタキ、シロハラ、アカハラ、ツグミなども、公園内でよく見られるようになります。これらは、餌を求めて山の高い所から低い所へ下りてきたり、越冬のために北方からやってきたりする鳥たちです。



ジョウビタキ



ルリビタキ♂



イカル



ウソ♂

巣箱をチェック！



繁殖シーズンを終えた巣箱は、取り外しメンテナンスをします。また秋に取り付け、冬になると鳥たちはその巣箱を「ねぐら」に利用します。



城山名木物語

◆御林 ～木一本、首ひとつ～

御林の管理は地元の村々に委託されました。その一方で無断での伐採はもちろん、入るだけでも厳罰に処されました。「木一本、首ひとつ」などとも言われたようです。

1788年の『太井村鏡帳』で城山御林の樹木について、山崩れで流出したり、大風で折れたりした樹木の本数、何時の山崩れだったかなど細かく書き上げられています。

また、生育している樹木の種類、本数、樹高、目通りなどを細かく書き上げています。ちなみにこの時に報告されている樹種は、松木650本、雑木21350本、榎（モミ）10本となっています。一本一本数え上げたのでしょうか。

◆消えたアカマツ松根油・バイオマス燃料？

城山の尾根筋には2000年頃まではアカマツの林がありました。真偽は分かりませんが、古老から、城山のアカマツは松根油（しょうこんゆ）を採取するために植林したものだと言ったことがあります。松根油は太平洋戦争中、ゼロ戦などの

航空機用燃料として使用が検討されましたが、生産に非常に労力がかかり、また効率が悪かったため実用化には至らなかったようです。

城山を写した古い写真には松の大木が写っています。近年まで残っていたアカマツはその子孫と思われるのですが、松枯れにより枯死し、残ったものは数えるほどです。

◆大杉は語らず

飯縄神社北側にある樹齢800年とも900年とも伝わる大杉は、城山のシンボルとして、また飯縄神社の御神木として長く親しまれてきました。しかし、残念ながら2013年8月の落雷で根元から5mを残して焼失してしまいました。

市内の旧家に伝わる『城山御林飯縄宮絵図面』（幕末に描かれたものと思われる）には、杉木式拾本・目通り一尺五寸より八尺五寸との書き込みがあります。この八尺五寸のスギが大杉と考えられます。

もし大杉と会話ができたら津久井城のことや当時の森のことも分かるのかもしれませんが、焼けた大杉は黙して語りません。



飯縄曲輪の大杉
(2013年4月撮影)



尾根沿いに見えるマツ
(大正9年撮影)

鷹射場東側尾根のアカマツ
(1995年撮影)

4. 冬の城山

雪の降った城山は、一面の銀世界になります。木々が葉を落とす冬でも、草むらではひっそりと赤い実を付けたフユイチゴを見ることができます。



冬に見られるなかまたち

●津久井湖城山公園には 静かな時間が流れます

賑やかだった秋も終わり、木々は葉を落とします。

木々が葉を落とすおかげで公園にすむ動物の代表、ムササビに会いやすくなります。



根小屋地区入口

●冬芽の話

植物たちは春に新しい葉や花になる芽を固いうろこの

ような皮や毛がふさふさと生えた皮、時には葉自体を毛で覆って冬の寒さや乾燥から守ります。このような姿の芽を冬芽と言います。冬芽は植物によって異なり個性的な芽が多いので、ぜひ観察してみてください。



コブシの冬芽

●葉痕

冬の枝を見てみると可愛い顔の様な模様が見られます。これは秋



ヤマトアオダモの葉痕

に葉が落ちた痕で“葉痕”と言います。葉痕は木の種類で異なりますが、同じ木でも一個一個表情が違います。ぜひお気に入りの顔を探してみませんか？

●シモバシラ

冬になり、氷が張るような寒さになると地中の水分が凍ってできる霜柱をご存じですね。実は植物にも「シ



シモバシラの花



シモバシラの霜柱

モバシラ」があります。シソ科のこの植物は、冬になると地上部は枯れてしまいますが、根はしばらくの間活動しているので、根が吸い上げた水がその枯れた茎からにじみ出て凍り、キレイな氷の柱となって私たちを楽しませてくれます。

●寒くても鳥たちは 元気！

上を見上げるとイギリスヤカラスザンショウの実が残り、それらの実を目当てにツグミやジョウビタキなどの冬鳥が訪れます。



ツグミ

●じっと春を待つ虫たち

冬の間、虫たちは寒さをじっと耐えて暖かい春が来るのを待っています。カメムシやテントウムシなどのなかまはみんなで集まって、樹の穴や倒木の



クサギカメムシ

ナナホシテントウ

下、時には建物の壁の隙間などへ入って冬を過ごします。

●イノシシの穴掘り

公園の大きな住人イノシシは、この時期餌探しがいへんです。園路の横の土がまるで耕したように掘り返されているのを見たことはありませんか。これはイノシシが土の中のミミズや虫、植物の根や秋に落ちたドングリなどの餌を探して鼻で掘り返した痕です。イノシシも生活がかかっていますが、公園もきれいにしておきたいので悩みの種になっています。



イノシシの掘り返した跡

●その他に見られる植物



フイチゴ (実)



ヤブツバキ (花)



オニシバリ (花)



イギリス (実)



カラスザンショウ (実)

●その他に見られるいきもの



コゲラ



ジョウビタキ



ルリビタキ



エナガ



メジロ

鳥とムササビの住宅地図

●巣箱ウォッチング

津久井湖城山公園では「巣箱プロジェクト」として、来園者と一緒に巣箱を作り、園内の樹木に取り付けています。

ぜひ、野鳥たちが巣箱を利用する姿を観察してみてください。

冬になると鳥たちは、日没頃に戻ってきて巣箱を「ねぐら」にします。「ねぐら」に利用した巣箱は、子育てのために営巣する確率が高く、その後の子育ての様子を観察することもできます。



シジュウカラの巣箱



大きな巣箱は、ボクの家です。(ムササビ)

●巣箱マップ



公園のムササビ物語

ムササビは、広くはネズミのなかま、狭くはリスのなかま^{※1}に属する夜行性の哺乳類で、被膜を広げて滑空できることが最大の特徴です。公園付近の生息地では高尾山（八王子市）、神奈川県下では大雄山最乗寺（南足柄市）などが有名ですが、津久井湖城山公園にも、水の苑地と花の苑地の一部を除いて、ほぼ全域に生息しており、隣接する根小屋諏訪神社付近の緑地を含めると、40～50頭位が生息していると推測されています。その他、公園内のリスのなかまでは、昼間活動するニホンリスは少数生息していますが、ムササビと同じ夜行性のニホンモモンガの生息は確認されていません。

ここでは約7年間の観察から得られた、公園内のムササビの生活についてお話をします。^{※1}齧歯（げっし）目リス科

●ムササビ観察の旬は冬

公園の位置する津久井（相模原市緑区）は横浜市などに比べ、冬の気温は低く^{※2}、特に夜間から早朝の冷え込みはかなり厳しいものがあります（横浜市と比較して、冬の最低気温〈12-2月〉は、平均約4℃低い）。

^{※2}平成24年度自然環境調査データ

しかし、冬は他の季節に比べて、
① 観察の起点となる巣箱の利用率が

高い。
② 落葉樹が葉を落としていて、林の中で活動中のムササビを見つけやすい。
③ 駐車場の閉鎖時間まで長い観察時間が取れる。

といったような、この季節ならではのメリットがあります。では、防寒対策をしっかりとした上で、ムササビ観察用の赤いライトを用意して、冬の夜のムササビ観察に出かけましょう。

●ある夜の観察ノートから

（日の入りから 19:00 まで）

今日は12月13日。1年中で一番早く日が暮れる時期です（日の入りは16:29横浜時間）。落葉樹の葉もかなり落ち、冬型の気圧配置が緩んだ今夜は、「ムササビ観察日和」のようです。私たち今夜の観察メンバー3人は、パークセンターでムササビの最新情報と観察コースを再確認して、今夜のスタート地点である城坂橋の7号巣箱に向かって歩きます。ほどなく城坂橋に到着。そっと赤いライトを巣箱に向けます。ムササビはまだ顔を見せていません（16:42）。巣箱の前で待つこと約10分。待望のムササビが巣箱から顔を出しました（16:53）。

双眼鏡で見てみると、何か「眠そうな顔」。そう、夜行性のムササビはまだ起



写真①

きたばかりなのです。1分位で顔を引っ込めてしまいました(16:56)。

しかし、顔は見えなくなりましたが、双眼鏡でよく見てみると、中でムササビは激しく動いていて、どうやら「毛づくろい」をしているようです(16:58)。

一度、引っ込んでから5分。再び顔を出しました。今度はしっかり外の様子をチェックしている様です。ほどなく半身を巣箱から乗り出し、下の方を見えています(写真①)。公園のムササビではよく見られるポーズですが、こんな姿勢で何をしているのかは、まだ、よくわかりません。

約2分、このような姿勢で固まった状態から、急に身をひるがえし、巣箱から全身を出し、巣箱の付いているケヤキの幹を、登りはじめました。「あっ飛んだ!」メンバーの一人が声を上げました。滑空したムササビは、牢屋の沢の対岸に「着木^{※3}」した様ですが、ここでいったん姿を見失ってしまいました(17:05)。

※³ムササビの滑空後の着地点は、ほとんど木の幹なので着陸ではなく「着木」。



写真②

ムササビの姿を見失った私たちは、城坂橋の上で少し待つことにしました。程なく、牢屋の沢の下流側から、ムササビの鳴き声が聞こえました。今夜は初めて聞く鳴き声^{※4}です。

※⁴一般に「グルグル」と聞きなしていますが、そうとは聞こえないかも。

方向からして、声の主は巣箱から出た個体とは別のようです。少しすると、下流側のエノキの木にムササビのシルエットが見えました。気づかぬうちに滑空してきたようです。その時、橋の近くで「パコッ」と聞こえるムササビの着木音。ムササビが橋の下流側近くのイタヤカエデの木の幹を登ってきました(写真②)。こちらは、巣箱を出た後、姿を見失っていた個体で間違いのないようです。樹冠部まで登ったムササビは、2声ほど鳴いた後、皮膜を大きく広げて城坂橋の上を上流側に向けて滑空していきました。

滑空するムササビの姿を間近で見た興奮も冷めやらぬうちに、下流側のコ



写真③

ナラの樹冠部にもう一頭のシルエット。こちらは先程、最初に鳴いたムササビのようで、エノキの木を経由してこまで来たようです。樹冠部で、何やら少し口にする仕草を見せたあと、先に滑空した個体を追いかけるように、橋の上を上流側に滑空して行きましたが(写真③)、沢の上流側は立ち入り禁止地区なので、この2頭を追って観察するのは断念しました(17:18)。

私たちは当初の予定通り、根小屋周遊園路を「反時計回り」にムササビを探して歩き出しました(17:25)。

デッキ園路の入口は、ムササビがよく餌を食べにくるクヌギがありますが、今日は気配がありません。少し遠くで、ムササビの鳴き声。森のステージ周辺を縄張りにしたムササビの声でしょうか(17:34)。

デッキ園路の2つ目のヘアピンカーブの手前でした。木の上から何やら、パラパラと音がしています。杉の木の上でムササビが何かしているようです。球



写真④

果を食べているのかもしれませんが。あるいは、糞を落としている音だったのかもしれませんが。ようやく音の主を見つけました。尾の先が白いオスのムササビ「オジロ」です(写真④)。その時、山側からムササビの強い鳴き声が。するとすぐに、強く鳴いたムササビがこちらの杉の木に向かって滑空・着木し、先に杉の木にいた「オジロ」と小競り合いになり、追いかけてこをはじめました。どうやらこちらオスのようで、まもなく発情期を迎えるメスをめぐる争いの「前哨戦」なのかもしれません。程なく決着が付き、「オジロ」の方が争いに敗れたようです。

小競り合いに勝ったムササビは、となりのコナラの樹冠部に移り、キュルキュルと鳴き続け、ここは自分の縄張り^{※5}だと強く主張しているようでした(17:55)。

※⁵ムササビの場合、明確な縄張りを持っているのはメスの方。



写真⑤

お寺の鐘が聞こえました。これは近くにある功雲寺の鐘の音で、私たちの観測時間の一つの目安として使っています(18:00)。

デッキを登りきり、舗装園路につくと2号巣箱。近くにはムササビが自分で掘った自然巣穴もあります。ここで、赤いライトを持った、別の観察グループと会い、情報交換すると2号巣箱からも、1頭が出巢し、近くにはほかに2頭いて賑やかだったとのこと。やはりメスの発情期^{※6}が近いせいかもしれません(18:15)。

※6メスの発情期は年2回あり、ふつう12月と5月。2014年、公園では1月下旬にも見られた。

途中、展望広場からは、根小屋から長竹にかけての街灯かりと、丹沢の山並みがよく見え、この時、麓の方からムササビの鳴き声が聞こえました(18:28)。

再び周遊デッキに歩みを進めると、程なくバラバラと何かが落ちる音がして、1頭のムササビがコナラの樹冠部にいるのを見つけましたが、もうあまり時間

がありません。明日の日中、周遊デッキに落ちた「食痕^{※7}」(写真⑤)を探すことにして先を少し急ぎます(18:32)。
※7文字通り、餌を「食べた痕跡」。公園ではデッキ園路の上に落ちているものが見つけやすい。

津久井湖と南高尾山稜の山並みを展望できるのが〈こいじ〉。ここで長い距離を滑空するムササビを見ることがあるのですが、今夜は根小屋諏訪神社の方向から鳴き音がするだけです。3号巣箱の前を通り、四季の広場を下っていると、牢屋の沢の杉林から再びムササビの鳴き声がしました。最初に7号巣箱から出たムササビかもしれません(18:45)。

残念ながらここで駐車場閉場まであと15分となり、気温は摂氏2℃。だいぶ放射冷却も進んできたようです。今夜の観察はここで終了となりました。駐車場へと向かう私たち3人の後ろには、冬を代表する星座「オリオン」が昇ってきていました。

●皆が帰ったあとで (19:00から夜明けまで)

さて、その後、公園のムササビたちはどのような行動をしているのでしょうか。公園での観察回数はまだ少なく、未解明なことも多いのですが、少しお話ししたいと思います。行動開始から3



写真⑥

時間あまり経つと、ひと通り餌を食べたムササビの行動は比較的静かになり、木の枝で休息するもの、あるいは巣箱に戻って休むものもいます。この時、必ずしも、夕方に出た巣箱に戻るわけではなく、別の巣箱に入ることもあります(写真⑥)。

再び活発に動き出すのは、午前2時頃からです。この頃から再び餌を活発



写真⑦

に食べはじめます(写真⑦)。そして夜明け間近、天文薄明がはじまり、星たちが見えなくなるころ、ムササビたちは大急ぎでねぐらにする巣箱や巣穴に戻ってきます。帰巢のときは、ほんとうに急いでいる感じで、公園でムササビの滑空が、たくさん見られるのは、むしろこの時間帯かもしれません。

TSUKUIKO SHIROYAMA COLUMN

ハンデを負ったムササビたち

◆片目のムササビ

2012年6月まで公園内に生息していた左目を失明したムササビで、「さくら」と名づけたメスでした。3号巣箱を使用して出産・子育てもしました。片目ながら滑空も普通に出来て、最長約60m滑空するのを観察しています。



◆尾の切れたムササビ

最初に3号巣箱で発見されたムササビで、「さくら」の子供とも考えられる、メスのムササビです。写真で見ると通り、尾がほとんど切れておりません。2015年6月現在生存しています。



雑木林と暮らし

落葉広葉樹が主体の雑木林は、晩秋になると木々の葉は色づき、落葉が始ります。葉を落とした冬の雑木林は明るく、足元は落ち葉で埋め尽くされます。ガサガサと音を立てて林の中を歩きまわると、靴底を通して地面のふっくらとした柔らかさが伝わり、心が和むものです。

林の中では、根株の部分が大きくなって、そこの地際から幹が二本も三本も伸びている木を見つけましょう。大きな根株はその木が何度も切られた証です。幹が来られると、切り株からは芽が出て、再び大きな木に育っていきます。このような森の再生をぼうがこうしん萌芽更新といいます。

かつて、切った木は、薪や炭に焼いて燃料にしました。また、そのままシイタケのホダ木にすることもありました。落ち葉は田んぼや畑のたい肥とし

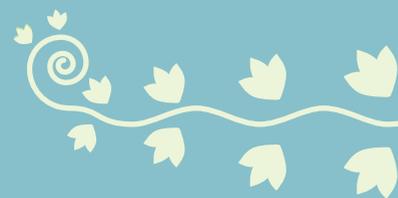


て大切なものでした。50年ほど前までは、雑木林の中にあるものは生業のために使われていました。

薪や炭に適した太さの木を得るために、十数年ごとに伐採を繰り返すことで、同じ林が維持されていたのです。

いつも日光が降り注ぐ明るい雑木林は、たくさんの種類の野草に恵まれ、昆虫たちも集まる、賑わいのある林でした。

雑木林を保護しようと思って、手を付けずにおくと、その林はやがて常緑の林に代わってしまいます。雑木林は、いつも人が手を入れて収穫し続けなくては雑木林ではなくなってしまうのです。



第3章

公園の自然を守るために

人と自然が共生できる公園をめざして

「利用」と「保全」

●人と自然が共生できる公園を目指して

津久井湖城山公園は「城山」の山城全体を取り込んだ県内でも最大規模の都市公園です。

都市公園は、緑と憩いの場を市民に提供する場として重要な役割を担っていますが、津久井湖城山公園はそれだけでなく、700種類以上の植物や約900種類の昆虫などの貴重な自然環境を保全する役割も果たしています。

センサーカメラ（ケモノ道に赤外線センサーを設置して動物が横切ると撮影が出来るカメラ）を園内に設置すると、タヌキやキツネ、イノシシ、テン、アナグマなどが撮影され、公園内に多くの野生動物がすんでいることがわかります。このように公園は人間だけではなく、様々な生き物の生息環境としてかけがえのない場所になっているのです。

また、公園内には絶滅危惧種に指定



自然環境保全活動のようす

されている貴重な生物も生息しており、地元の市民団体やボランティアの皆さんも携わって保全活動が行われているほか、最近では大学生が研究対象として野生生物の生態調査に取り組んでいます。

このように、公園には「利用」と「保全」という2つの役割があり、この役割をいかにバランスよく考えながら公園管理していくかが、重要なポイントとなります。

そのため、「自然環境の保全を図るエリア」と「人が利用するエリア」をいかに最適に区分するか、公園の環境に精通した有識者を交えて議論を行っています。

人も自然も共生できる公園を目指して取り組みは続きます。



在来種保護のためのマーキング作業

「在来種」と「移入種（外来種）」

津久井湖城山公園には本来生息するはずのないアライグマなどの移入動物が生息しています。植物も同様に、オオバタクサやセイタカアワダチソウ、ワルナスビなどの移入植物が侵入しています。

移入種の侵入が、在来種の生息や城山在来の植生を脅かす存在になりつつあります。そこで公園では、在来種を保護し、移入種を駆除するための様々な取り組み

を行っています。しかし、移入種根絶には至りません。

さらに移入種駆除が困難なのは鳥類です。今や県内の至る所で確認されるガビチョウやソウシチョウなどの移入種は公園でも繁殖している可能性が高くなっています。

※移入種…人の手を直接間接を問わず、自然分布地以外に移動または放出された生物種をいいます。



センサーカメラに映ったアライグマ



ガビチョウ

<津久井湖城山公園における在来種保護の取り組み>

- ・アライグマ捕獲用の箱ワナを設置
- ・移入植物の選択的除草（移入種など対象種だけを除草すること）
- ・希少植物に対する注意看板の設置、除草時の刈取防止のマーキング

●移入種



オオバタクサ



セイタカアワダチソウ



ワルナスビ

資料「自然環境調査報告書」より

津久井湖城山公園では、公園整備の基本計画を策定した平成5年に自然環境調査を行っています。その後、公園整備が進んだことから自然環境の現状を把握するため、平成23年から24年にかけて2回目の自然環境調査を行いました。ここでは、その成果の一部をご紹介します。

●調査項目

◆生物相調査

(植物相、哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫類)

◆植生調査

◆その他調査

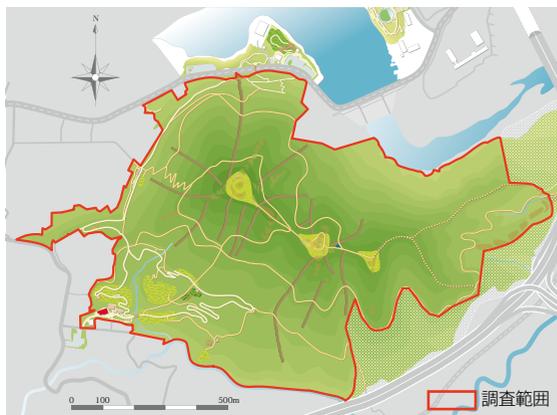
(水文調査、気温・湿度調査)

◆市民との連携調査

項目	内容
哺乳類	センサーカメラ調査 樹上性動物調査
鳥類	野鳥調査・フクロウ調査 ミゾゴイ調査
昆虫類	オオムラサキ調査 チョウ類調査

●調査範囲

※公園計画区域のうち、花の苑地の一部と水の苑地を除く範囲



根小屋から見た城山（南面）



水の苑地から見た城山（北面）

●調査結果概要

分類群	確認種	重要種	特定外来生物	要注意外来生物
植物	726	6	0	17
哺乳類	19	4	1	0
鳥類	74	31	2	0
両生類	4	1	0	0
爬虫類	11	6	0	0
昆虫類	884	15	0	1
合計	1,718	63	3	18

●調査結果の特徴

【植物】 植生としてはほぼ全域が樹林地であり、コナラ林やスギ・ヒノキの樹林地、その他の群落も混在している。尾根を挟み北側と南側とで植生に違いが見られたほか、かつて存在したアカマツ群落の消失やコナラの大径木化が確認された。

種としてはコナラなどいわゆる雑木林に生育する種が多いが、人手が入らずに長年が経過していることから、アラカシなどの常緑広葉樹林に生育する種も多く見られた。また、下草刈りの有無により草本の出現種が異なっていた。

【哺乳類】 繁殖が確認されているムササビに加え、テンやニホンリス、ヒメネズミといった樹林性の種やモモジロコウモリ、タヌキ、キツネなどが確認された。センサーカメラではノウサギ、イノシシが多数撮影されている。特定外来生物であるアライグマも確認された。

【鳥類】 通年見られたヒヨドリやメジロ、コゲラなどに加え、冬季はルリビタキ、夏季はキビタキ、オオルリなど年間を通して様々な鳥類の利用が確認された。全体としては樹林性の種が確認種の3/4を占めたほか、特定外来生物であるガビチョウやソウシチョウも確認された。

【両生類・爬虫類】

両生類の繁殖に適した場所が少なく、カエルの種類は多くないが、爬虫類はシマヘビやアオダイショウのほか、県内でも目撃情報の少ないタチホヘビやシロマダラを含め、本州で確認できるヘビ類が全種確認された。

【昆虫類】 樹林性の種を中心に草地や林縁、水辺に生息する種などが確認された。カブトムシやノギリクワガタ、オオムラサキ、テングチョウなど雑木林の種が多く見られたが、コナラは大きく育ちすぎて樹液がほとんど出ていない状況。その他ヤマトタマムシやセスジツクムシ、要注意外来生物であるアカボシゴマダラという蝶も確認された。

【気温・湿度調査】

最低気温 -6.9度（山頂）
最高気温 35.6度（根小屋）
冬季の平均気温は、横浜よりも3～5度低く、内陸型の特徴を示していました。

●おわりに

今回ご紹介した調査結果の詳細な内容は、ホームページやパークセンターでご覧いただけます。

パークセンターとイベント

津久井湖城山公園パークセンターは公園管理事務所と展示室が一体になっている施設で、公園利用者の休息、案内・情報提供施設として、また自然や歴史に関わる皆様の活動拠点として、2006年4月に根小屋地区にオープンしました。

公園利用の案内や情報提供のほか、歴史や自然に関する展示・解説、調査の速報なども行っています。

公園をご利用の際はまず、パークセンターにお立ち寄りください。

また、公園では自然や歴史をはじめ、公園をより楽しんで頂くためのイベントを年間で約60件開催しています。

●自然観察会

地域で活躍する自然観察指導員や研究者を講師に迎えて、植物や昆虫、シダ植物、鳥などの公園に暮らす生き物たちを観察します。



ムササビ観察会

一歩踏み込み本物を自分の目で観るのが、この観察会のモットーです。

●ネイチャーゲーム

グリーン相模原シェアリングネイチャーの会の方を講師に迎え、公園でネイチャーゲーム！これはアメリカ発祥の自然体験活動のひとつで、楽しく体験するアクティビティを通して自然を学ぶイベントです。



自然観察会



ネイチャーゲーム

●いきものがたり

公園の生き物について、見て、知って、話そう！ヘビやムササビといった、公園にすんでいるけど普段あまり知らない生き物について、専門の人も興味のある人も時には嫌いな人も集まって生き物について話します。

●津久井城こどもの日

戦国時代は山城だった津久井城で折り紙兜を作ってみよう！鎧を着てみよう！この日の主役は子供たち！毎年5月5日に開催します。



いきものがたり

●津久井城開城記念の日

津久井城は1590年6月25日に開城（落城）しました。その日を記念して津久井城の歴史について学んでみませんか。津久井城主内藤氏のお墓参りも行います。

●城山キャスリング

公園の史跡解説員が同行して津久井城の遺構群を案内します！公園に眠る遺構の数々を見にいざ出陣！



城山キャスリング



津久井城こどもの日



津久井城開城記念の日／講演会

津久井湖城山公園を歩くみなさまへ

●誰もが安全に楽しみ、貴重な自然を守っていくために



公園内での火の使用はやめましょう。



公園内の動植物をとったり、公園外の動植物を持ち込んだりしないようにしましょう。



ペットの散歩はリードをつけ、フンなどの始末もお願いします。



三脚を使用する際には、他人に迷惑がかからないよう注意しましょう。



園路や登山道以外は立ち入らないでください。



生き物にエサをやらなさい。



自転車などの車両は危ないので乗り入れはやめましょう。

公園ゆるキャラ紹介 【武者サビ君】

津久井湖城山公園にすんでいるんだよ



ボクたちが安心して暮らせる森を守ってね!

図鑑さくいん

ア

アオハダ	30
アカシジミ	21
アカネズミ	33
アカボシゴマダラ	13
アサギマダラ	31
アズマモグラ	34
アセビ	12
アブラコウモリ	34
アライグマ	49
アラカシ	06・30
イイギリ	38
イカル	35
イタヤカエデ	30
イヌガンソク	22・23
イヌワラビ	22・23
イノシシ	32
イロハモミジ	30
イワツバメ	18
ウグイス	13
ウグイスカグラ	12
ウスバアゲハ	15
ウソ	35
ウチワゴケ	23
ウツギ	20
ウラギンシジミ	31
ウラナミアカシジミ	21
ウラナミシジミ	31
エゾビタキ	35
エナガ	17・39
オオイヌノフグリ	12
オオカマキリ	31
オオタカ	35
オオバノイノモトソウ	22・23
オオブタクサ	49
オオムラサキ	21・26・28
オオルリ	25
オカトラノオ	20
オニシバリ	38

カ

カタクリ	14
ガビチョウ	49
カブトムシ	21・26
カヤネズミ	33
カラスザンショウ	38
キチョウ	13
キビタキ	21・25

キ

キブシ	12
キヨスミウツボ	24
ギンリョウソウ	24
クサギカメムシ	39
クヌギ	30
クロアゲハ	20
クロヤツシロラン	24
コアオハナムグリ	15
コウヤワラビ	22
コオロギ	31
コカマキリ	31
コゲラ	17・39
コサメビタキ	25
コナラ	06・30
コブシ	12・38
ゴマダラカマキリ	20

サ

シジュウカラ	13・17・40
ジネズミ	34
シモバシラ	38・39
シヨウビタキ	35・39
シラカシ	30
シロスジカマキリ	26
スギナ (ツクシ)	23
スタジイ	30
セイタカアワダチソウ	49
セイヨウミツバチ	15
ゼンマイ	22

タ

タチツボスミレ	12
タヌキ	32
チョウセンカマキリ	31
ツグミ	39
ツバメ	18
テン	32
トウゲシバ	23

ナ

ナナホシテントウ	39
ニシキギ	30
ニホントカゲ	13
ニリンソウ	14
ノコギリクワガタ	21

ハ

ハナアブ	15
ハラビロカマキリ	31
ヒメズミ	34
ヒメネズミ	33
フクジュソウ	14
フユイチゴ	38
ベニシジミ	13
ベニシダ	22・23

マ

マメツタ	23
ミズキ	06・20・30
ミヤマセセリ	13
ミンミンゼミ	21
ムササビ	42・43・45
ムラサキケマン	14
ムラサキシキブ	30
メジロ	13・17・39
モミ	06
モモジロコウモリ	34

ヤ

ヤブサメ	18
ヤブツバキ	38
ヤブデマリ	20
ヤマアジサイ	20
ヤマイタチシダ	22
ヤマガラ	13・17
ヤマツツジ	12
ヤマトアオダモ	38
ヤマトタマムシ	21
ヤマボウシ	30
ヤマユリ	20

ラ

ルリビタキ	35・39
ワラビ	23
ワルナスビ	49

交通のご案内

■根小屋地区（パークセンター）へは

- ・橋本駅から三ヶ木行きバス25分「津久井湖観光センター前」下車
「湖畔展望園路」を歩いて徒歩20分
- ・橋本駅から新小倉橋経由三ヶ木行きバス25分
「東金原」または「金原」下車 徒歩15分

■水の苑地へは

- ・橋本駅から三ヶ木行きバス19分「城山高校前」下車 徒歩3分

■花の苑地へは

- ・橋本駅から三ヶ木行きバス20分「津久井湖観光センター前」下車 徒歩1分



■神奈川県立津久井湖城山公園データ

【開園】

平成11年4月1日

【開園面積】

77ha（平成30年3月現在）

【公園種類】

広域公園

■パークセンター

【所在地】

〒252-0153 相模原市緑区根小屋162

電話042-780-2420

【開館時間】

9:00～17:00

【駐車場利用時間】

8:00～19:00（無料）

あしがき

この冊子は、津久井湖城山公園の中心的存在である「城山」の四季といきものたちに焦点をあて、その魅力を伝えるために制作したものです。

かつて山城であったこの山には歴史や自然の素材（宝石）が数多くあります。

今回、この宝石たちをざくざくと発見し、皆さんにその価値を伝えてくれたのは、この公園に熱い思いを寄せてくれる市民の方たちです。彼らは足しげく公園に通い、城山の季節を感じ、慈しみ、愛しています。この冊子はそんな市民の方たちによる活動の成果の一端をご紹介いただく形でモザイク状に執筆していただきました。

これまであまり自然について知らなかった方にも興味を持っていただき、楽しく読んでいただけるような様々な視点からの読み物として、また、公園を歩く際のガイドブックとして使えるようにまとめましたので、この冊子が、読んでくださったあなたとこの公園の自然を結ぶ大切な一冊になれば幸いです。

最後になりましたが、発刊にあたり執筆をいただいた皆様、貴重な写真をご提供いただいた皆様、その他編集にご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

執筆者

- ・秋本和宏 ・秋山幸也 ・朝比奈邦路 ・江角英将 ・篠崎正博
 - ・清水海渡 ・菅原正士 ・森美文 ・守屋浩之 ・安川源通
- （制作協力：株式会社アスコット）

津久井湖城山公園ガイドブック 自然のモザイクざくざく案内 —城山の四季といきものたち—

平成30年3月

発行 公益財団法人 神奈川県公園協会

問合せ 県立津久井湖城山公園 パークセンター

相模原市緑区根小屋162

TEL.042-780-2420 FAX.042-780-2422